



慶應義塾大学ビジネス・スクール

吉本興業(株)

—『お笑い』業界の独占企業—

吉本興業(株)の2006年3月期決算は、史上最高の好決算となった。連結営業収入は前年比20.8%増の462億円、経常利益は同36.2%増の64億円、当期純利益も58.4%増の35億円となり、いずれも最高だった。営業収入の中では制作収入が24.4%増加したが、これはユニット番組制作の受注増に加えて、所属タレントの出演機会が増えたためである。さらに「ダウンタウンのガキの使いやあらへんで！！」シリーズなどのDVD販売も好調に推移した。

特別利益には、連結子会社ファンダンゴのヘラクレス(大阪証券取引所)上場による持分変動益16億円も含まれていた。

沿革

吉本興業の基礎は明治45年4月1日、吉本吉兵衛・せい夫婦が大阪・天満天神宮の裏門に面した一角で「第二文芸館」という、落語の寄席経営に乗り出したことに始まる。

明治の末期頃、大衆娯楽の興行といえば、演劇では歌舞伎、寄席の演芸として落語、講談、女義太夫、浪花節などがあり、その他に相撲、見せ物、新興の活動写真などがあった。

寄席の経営に成功した吉兵衛らは、既存の小屋を買収して寄席のチェーン化を進めた。大正初期の同時期に成功した興行に、阪急の小林一三が生んだ宝塚歌劇がある。寄席は次々と成功を収め、吉本が一時は大阪の寄席興行をほとんど占めるほどの勢いをもった。しかしやがて落語は大衆から飽きられはじめた。吉本は次の売り物を探さなければならなくなってしまった。

そんなとき吉兵衛にかわって、せいを助けていたせいの実弟・林正之助は、新興の芸「万歳(まんざい)」(後の昭和初期に吉本が「漫才」に改称)にいち早く注目する。万歳は、落語のように枠にとらわれることがなく、自由奔放な笑いを巻き起こしていた。正之助は万歳を番組の中心にすえ、これが吉本の「花月」などの小屋で大当たりをとり、超満員の観客を集めて大成功をおさめる。昭和初期、当代人気の漫才師はほとんど吉本所属というほど、業界を席巻する勢いだった。

その中でも大人気を博したのは、花菱アチャコ・横山エンタツのコンビである。エンタツ・アチャコは、ドタバタ喜劇だったそれまでの漫才とは違い、会話の掛け合いを中心とした「しゃべくり万歳」(今の漫才の原型)を創造していた。特にエンタツ・アチャコの十八番「早慶戦」は一世を風靡するほど、大ヒットした。

このケースは慶應義塾大学ビジネス・スクール山根 節が、公表資料と取材によってクラス討議の資料のために作成した。
(協力:M25 杉山大輔 2006年10月)